
日本数理科学協会会報

37 / 2004 . 12

編集委員 藤井正俊 (委員長)/ 藤井淳一

目次	
I 新設委員会について	会長 井関清志
(1) *数理科学学術振興委員会について	
*学術会議公開講演会「男女共同参画」について	
(2) *日本学術会議シンポジウム「横幹科学を考える」への参加案内と 「数理科学横幹推進委員会」の立ち上げについて	
(3) *数理科学国際交流推進委員会について	
II 遠隔研究集会について	事務局
(1) *Distance Symposium のテスト(10月26日)の報告	
(2) *IVMS 2006 ~ 2008	
(3) *2005年3月23日の第2回テスト“Bon jour”について	
III 海外会員の処遇について	井関清志
(1) *2005年以降のNewsletter と会報について	
(2) *JAMS Bylaws について	
(3) *JAMS WWW HP の構成	
IV 協賛研究集会の Announcement	事務局
(1) *第4回情報ネットワーク性能評価研究会	
(2) *The 4-th International Conference on Nonlinear Analysis and Convex Analysis	
V JAMS からのお知らせ	事務局
(1) *小松勇作先生御逝去	
(2) *life member について	
(3) *2005年会費納入の御願い	

I . 新設委員会について 会長 井関清志

登録学術団体制度の改変及び、大学の独法化に対応して、JAMS では (1) ~ (3) の3つの新しい委員会を発足させ、学会活動を行って行く事になりました。

I - (1) 数理科学学術振興委員会について 井関清志

前号の会報(36号)でお知らせしましたが、日本学術会議会員候補者選考委員会会長から、会員候補についての情報提供の依頼がきました。

JAMS では、依頼をされた4名以内の「科学者情報」をどう選ぶかについて、JAMS の中に、所属機関の管理職(学長、副学長、学部長、研究科長、研究所長、評議員等)を勤めておられる方々で、「数理科学学術振興委員会」を構成し、(1) 要請されている科学者の実際の選定と(2) 科学技術及び若手科学者賞の候補の推薦(3) 専門委員・評議員の候補者推薦、出来

れば、(4) 科研費の要請の支援 (5) 学術会議から要請があれば、連携会員の推薦等に当たって頂くことにします。

委員の方々は、

茨木俊秀、宮本勝浩、田畑吉雄、木村宏、八杉満利子、室津義定、木下佳樹

佐藤俊輔、佐藤優子、Wuyi Yue、有田清三郎

以上 11 名の方々です。

なお、持回り委員会の結果、女性会員候補八杉満利子先生、若手会員候補木下佳樹先生を推薦することになり、御本人の御承諾を得て、現在選考委員会へ手続中です。

学術会議公開講演会「男女共同参画」について

井関清志

(1) 日本学術会議より、表記の公開講演会の案内が来ましたので、「数理科学学術振興委員会」委員に下記の letter で御送りすると共に、JAMS の女性会員 15 名にも案内を御送りしました。又、JAMS の H.P.「日本学術会議から」に全文を載せると共に、e-mail でその旨 JAMS 会員各位に announce させて頂きました。

今後この種案内については、JAMS の H.P. にそのまま掲載し、案内があった旨の announcement を会員各位への e-mail でお知らせすることにさせて頂きます。

当日パネル討論では、「若手・女性研究者の研究環境」が討論されるようですが、日本の数理科学研究者の研究環境は、アメリカ数学会の女性会員の環境に比べて雲泥の差があります。

Prof.C.Morawetz のように、女性会長が出てくるような環境が学問を大いに進展させるものと考えられます。

(2) 次に、この講演会は、41 の学協会が共催学会となっています。共催するには、何がしか金銭を寄付する事が必要なのか、を学術会議事務局に聞きましたところ、金銭を出す必要はないとの事でした。JAMS としては「学術活動に男女共同参画」を推進するこの種イベントに、今後共催させていただくことを学術会議宛申し出ました。

I - (2) 日本学術会議シンポジウム「横幹科学を考える」への参加案内と「数理科学横幹推進委員会」の立ち上げについて

井関清志

横幹連合から JAMS 会長宛に H.P.「横幹科学学術団体連合から」に掲載した「日本学術会議シンポジウムへの参加の御願い」が来しました。

これは 2005 年 1 月 18 日に予定されている「学術会議でのシンポジウムの案内」と「横幹科学を考える」に対する「横幹連合の事前の討論集会」の案内です。

JAMS ではこの中の「リスクを評価する数理」に興味を持っておられる木下佳樹先生に、とりあえず参加して頂きますが、他にもこのテーマ、又は他のテーマのどれかに興味を持たれる方が希望されれば、連合では、「参加を歓迎します」との事です。

横幹については会報 34 号 (2004 年 3 月発行) に高橋渉先生が紹介の記事を書いておられます。JAMS では清水先生、功力先生、北川先生が数理科学の横幹活動を推進してこられた業績を受け継いでいます。

JAMS では今回のシンポジウムを機に、JAMS 内に「数理科学横幹推進委員会」を立ち上げ、横幹連合内の今回の joint symposium 等への参加と共に、連合内外の他学会、学術研究機関等との自由な研究交流を推進して頂くことにします。

予定された委員の方々は、次の方々です。

有田清三郎、猪原正守、茨木俊秀、石井博昭、石原忠重、稲垣宣生、宇佐美好文 Wuyi Yue、木下佳樹、木村宏、佐藤優子、佐藤俊輔、高橋涉、谷口正信、田畑吉雄、堤陽、寺岡義伸、渚勝、西田俊夫、宮本勝浩、韓尚秀、室津義定、八木厚志、吉田裕亮、米山寛二

I - (3) 数理科学国際交流推進委員会について 井関清志

御存知の通り、JAMS 会員の 1/4 以上が海外会員ですが、今迄の協会の年会における参集形研究集会では、海外会員の方々は事実上参加が難しいままになっていました。

今年から阪大中之島センター (ONC) の遠隔集会システムを借用させていただくと、海外会員の方々と研究集会を持てる可能性がある事が判明してきました。JAMS では、早速海外会員全員に、この旨を知らせ、2008 年位までに海をこえた研究集会を持ってみたい方には、2005 年中接続テストをして頂くことにしています。

この遠隔研究集会、(Distance Symposium) は、勿論 JAMS 会員の中だけの会であるべきでなく、世界の優れた研究者とつないで行われるべきものです。それで、この Distance Symposium (Videoconference) の開催をされる方々、及び相手方の Coorganizer 等の内外の方々に、会員非会員は問わずに、委員会に入って頂き、交流の仕事をして頂くのが望ましい。

JAMS には、Editor 等優れた海外の著名研究者は、100 名以上居られますし、高い水準の研究交流が行われると期待しています。

予定された委員の方々は、次の方々です。

有田清三郎、石原忠重、井関清志、茨木俊秀、Wuyi Yue、近藤正男、佐藤優子、佐藤俊輔、白旗慎吾、高橋正、高橋浩光、高橋泰嗣、高橋涉、谷口正信、堤陽、長尾寿夫、長田潤一、中西シツ、渚勝、西田俊夫、服部泰直、韓尚秀、藤井正俊、船越俊介、宮本勝浩、室津義定、安井義和、八木厚志、山田耕三、吉田裕亮、米山寛二、A.Blass, A. Favini, A.T.Lau, A.V.Arhangelskii, G.Preuss, H.Hudzik, I.A.Rus, J.B.Conway, J.Musielak, K.Denecke, K.Szajowski, L.M.Ricciardi, L.M.S.Ruiz, M.S.Srivastava, P.Domosi, P.K.Sen, S.Rolewicz, T.Kubiak, V.V.Mazalov, W.W.Comfort, Y.B.Jun

上記の外国の方々には、接続環境と御都合を、現在聞いています。

II 遠隔研究集会について

II - (1) Distance Symposium のテスト (10月26日) の報告 堤陽

(a) 大阪中之島センター (ONC) 第2会議室 (7F) と大阪国際大学経営情報学部、韓尚秀教室との連結は、簡単なルーチン操作で成功した。

(b) 韓教室のシステムが古いので、動きに対しては反応が遅かった。(システムは更新される予定。) 黒板の受像は不鮮明であった。板書より講義ファイルの出力が望ましい。

(c) 続くセミナー室 (模擬法廷+48 席) での実験ではハイビジョン映像版より鮮明であった。同じ接続先でも端末機器によって鮮明さが変わる、従って接続先で実際に使われる機器について事前にテストをする事が必要であると実感させられた。

II - (2) IVMS 2006 ~ 2008 事務局

この会報と共にお送りする驚色の英文記事は、SCMJ Vol.60, No 3 の From the JAMS 欄に掲載したものです。Vol.60, No 2 にも似た形式で、IVMS の Announcement を載せましたが、10 月 26 日阪大中之島センター (ONC) のシステムをお借りして、試行を試してみた結果、相手先大学及び参加大学等のシステムの状態を実際につないでみて調べる事が非常に大事であることが判明しました。

JAMS としては、2005 年 1 年間いろいろな相手先と十分な試行を行って後に、原則としては、2006 年から本番に入る事にきめて、その Announcement をこの形で、内外の会員 400 名及び SCMJ の内外の配布先 500 機関に行ったものです。

テストの実行 site は、内外会員の方々、IAB 及び、内外 Editor のの方々、Plaza を含む投稿者の方々、及び之等の方々の研究交流の相手先 group で、ご希望の方々になりますが、当方及び相手先の用意の出来次第行っていきます。

II - (3) 2005 年 3 月 23 日接続テスト“ Bon jour ”について 事務局

2005 年 3 月 23 日 (水)8 時 30 分から 21 時 30 分まで、阪大中之島センター 7 階 第 2・第 3 講義室において、次の予定で遠隔研究集会第 2 回テスト、“ Bon jour ”を行います。接続テスト先を受け付けていますので、テストを御希望の方は、希望大学、希望時間をつけて、scm4j@jams.jp 迄お申し込みください。接続予定先の環境を調べています。

8:30~10:30 アメリカ中西部との接続テスト
10:30~12:00 アメリカ、カナダ西部との接続
13:30~15:30 韓国 Pusan
15:30~17:00 韓国航空大学 Seoul
17:30~19:00 フランス
19:00~20:00 イタリア
20:00~21:30 Hungary、ルーマニア、ロシア

III 海外会員の処遇について

III - (1) 2005 年以降の Newsletter 及び会報について
藤井正俊、藤井淳一、高橋渉、山田耕三、西白保敏彦、石原忠重

JAMS 会報は、この 37 号まで日本語で年間 4 号を出し、国内会員に配布し、Newsletter は、17 号まで年 2 回英語で出版し、国外会員に配布していました。

JAMS の事務局が自前で、年間合計 6 回印刷し、発行をしていたわけですが、2005 年 1 月以降は、以下の発行方法を取り、(1) 印刷業務の合理化、(2) 会報の内容の充実、(3) 配布先の拡大 をはかります。

(1) 1月、7月 発行の今までの Newsletter は、(仮称) Notices from the JAMS 等 名称をかえて、SCMJ 鶯色版に組み込み、内外会員配布分 500 部は、その抜刷りとして、SCMJ 誌の印刷業者から受け取り、配布することにします。会報は、発行時期を年 2 回 5 月、11 月とし、同じ印刷業者に依頼します。

これに伴い(3)、Notices from the JAMS (旧 NewsLetter) では、内外個人会員向け 500 部、海外及び国内大学等の SCMJ 誌購読機関向けに 500 部、合計 1000 部に配布先が拡大されます。日本語会報年 2 回の配布は、今迄通り国内 300 部です。

(2) 内容の充実については、例えば連載物として「世界の研究機関の数理科学の紹介」等が掲載できるものと見込んでいます。

III - (2) JAMS Bylaws について 井関清志

(1) JAMS の海外会員は、会員の 1/4 以上を占めているにもかかわらず、会合や通信連絡の困難、不備もあって、JAMS の研究集会や運営については、つんぼ座敷におかれ、存在が事実上無視されてきました。会の基本となる会則自体が、海外会員は、蚊屋の外になっています。これは基本的におかしな姿で、いつまでもこの状態で放っておけません。

(2) 又日本国内では、独法化の話が出てきてから大学の教員は大変忙しくなり、総会、理事会はもとより、委員会も集合が難しく、電話もなかなか通じなくなって来ています。会議成立の為の定数の確保が難しく、委任状を集める手数も厄介になっています。総合して、運営の基礎を多人数の会議におく会議制では、事業を行っていくことが現実に無理になって来ています。

所で、アメリカ数学会は、2 万人を超える会員を持ちながら、効率的な運営を行っています。その骨子は、少数の officers が、それぞれの実務を行い、会員一般はこの officer の選挙を徹底して行うが、運営は officers に任せ、一々会議にかけないやり方である。また、年会の時に総会を開いているが成立の為の定数は会員の 2% に過ぎない。

JAMS でもアメリカ数学会の会則 (Bylaws) にならって、officer 制を採用し、事業の運営を簡素に又実質的に行う事が出来る様な、JAMS Bylaws を作り、これを内外会員に統一した会則としたい。会則改正の手続きは現行日本語会則に従って行うが、下記の日程を計画しております。

(1) Bylaws 試案を 2005 年 1 月 10 日発行の SCMJ, Vol61-1, Notices From the Jams 欄に載せ、抜刷りを全会員に御配りし、2 月 10 日締め切りで e-mail により御意見をきく。(2) 御意見をまとめた新案を 2 月中旬、内外会員各位に e-mail で送り、賛否を問い、2/3 以上の賛成で新会則を作る。

JAMS Bylaws 試案骨子：

Article I. Officers(執行役員に相当)。

構成は President(会長)、Ex President(前会長)、President Elect(次期会長)、Secretary1 (出版物の編集、担当役員)、Secretary2 (内外研究集会担当)、Secretary3(出版物の配布、販売) Treasure(出納官)。

以上 6 名で、(1) 立候補者について、会員全員による選挙により、選ぶ。

(2) 立候補者は、立候補の段階で、自己の担当すべき業務についての運営方針を H.P. 上に載せ、また会員全員宛に、e-mail を送り、知って貰う。立候補者がいない時は、前期の執

行委員会が指名して、立候補して貰う。

Article II. Board of Trustees(会計と監査)

(1) 構成と選出：Treasure2名(監事)、会計委員1名、前期会計委員1名計4名、Officersの指名した次期委員について、会員全員による信任投票を行い、決定する。

(2)Function(機能)、Fund(基礎財産)を含む年間予算決算を行い、Councilへ提案し、承認を求める。

Article III. Committees (各種委員会): Secretary3名の仕事を分担補佐する委員会であり、officersの任命により構成される。

Article IV. Council(理事会)

1. 構成: 18名の委員からなる (1)6名のofficers(2)7名の海外委員 (Asia and Oceania, Europe, カナダ - 北米の西部, カナダ - 北米の東部 + 中南米) (3)5名の国内委員、

2. Functions: (1) 予算・決算及び事業報告、事業予定の審議 (2)officersへのadvices

Article V. Election of officers and Terms of office

Terms of office : president elect : 1.5年, the immediate past president: 1.5年.

president: 3年(例えば、2005年4月 ~ 2007年12月31日)

president elect : (2006年7月1日 ~ 2007年12月31日)

the immediate past president: (2005年4月 ~ 2006年6月30日)

Article VI. Members and Their election

section1. There shall be ordinary, insitutional and corporate members.

Article VII. Dues and Privileges of Members.

単年度会員、3年会員、生涯会員(各会費はP.11参照)

Article VIII. Meetings

年会は、7月1日から10月15日迄の間に毎年行う。

Article IX. publications SCMJ

Article X. Amendment 会則改正手続

以下詳細は、2005年1月発行のSCMJ Vol.61-No.1のgreen pagesを御覧下さい。

III - (3)

JAMS WWW HP の構成

事務局

JAMSのWWW上のHome pageの構成を2005年から次のように変え、JAMSの活動がわかり易く見られるようにします。

日本数理科学協会

1. 構成：役員、委員会、選出、会則-Bylaws.
2. 会員制度：個人会員(正会員、学生会員)、機関会員、会員の特典、会員加入Form
3. 研究集会：年会、研究部会、IVMS、Mathematics Calender、F.A.Q.
4. 出版物：SCMJ.(print版)、SCMJ.(online版)、WWW.

IV 協賛研究集会の報告と announcement

IV - (1) 日本 OR 学会関西支部「情報ネットワーク性能評価」研究部会
・甲南大学知的情報通信研究所共催 第四回研究会開催の報告 Wuyi Yue

日時：12月14日(火) 15:00~17:30

場所：(株)CSK ニッセイ同和損保フェニックスタワー 10階

講演題目と講師：

(1) 「通信品質を考慮した通信ネットワークシステムにおける動的システム最適化」

Wuyi Yue (甲南大学理工学部情報システム工学科)

(概要) 通信ネットワークにおいて有限の周波数資源を効率良く利用するにあたり一定の通信品質保持のため、呼の到着率やチャネル数などが互いに影響しあう場合の動的システム最適設計と最適制御が必要である。本研究では、通信品質を考慮した待時通信ネットワークシステムにおいて、呼の到着率がチャネル数に依存する場合の最適設計を行う。本システム解析では、呼の待ちに関するコスト(待ちコスト)及びチャネルの通信時間に関するコスト(保留コスト)の2つのコストを考え、これら2つのコスト間で最良のバランスを達成するように定常状態におけるシステム総コストを最小にする。そして、システムのコスト構造を解析し、一定の条件下で待ちコストがチャネル数に比例して急速に減少していることを示す。さらに、チャネルの最適本数を計算する方法を提案する。最後に、数値例では計算結果を示し、本最適設計方法の有効性を示す。

(2) 「ユビキタスネットワーク社会に向けた ケイ・オプティコム の取組み」

高田 荘治 ((株)ケイ・オプティコム通信サービス事業本部営業計画グループ)

(概要) あらゆる情報機器が広帯域ネットワークで結ばれ、誰もがいつでもどこでも情報をやりとりできるユビキタスネットワーク社会の到来は、サービス利用者の快適かつ豊かな暮らしを実現するとともに、サービス提供者のビジネスチャンスの拡大にも繋がるものと期待されており、政府においても、2010年に実現する新たな社会の姿として u - J a p a n が提唱されている。このように、ユビキタスネットワーク社会が進展する中、F T T H を主に I P 通信サービスの提供拡大をしているケイ・オプティコムのサービス概要及びユビキタスネットワーク社会に向けた今後の事業戦略について概説する。

なお、研究会終了後、講師の先生を囲んでお初天神近くの「鳥よし茶屋」にて、忘年会を行いました。

次回の研究会は来年2月に開催予定。

IV - (2) The 4-th International Conference on Nonlinear Analysis and Convex Analysis 非線形解析学と凸解析学に関する国際会議委員会 高橋 渉

日時：2005年6月30日(木)~7月4日(月)

場所：沖縄コンベンションセンター 〒901-2224 沖縄県宜野湾市真志喜 4-3-1

問い合わせ先：東京工業大学大学院情報理工学研究科 数理・計算科学専攻 高橋渉

〒152-8552 目黒区大岡山 2-12-1、電話：03-5734-3028、FAX：03-5734-3028、

E-mail : wataru@is.titech.ac.jp

* Conference Objectives

The purpose of this conference is to get together world-wide experts on nonlinear analysis and convex analysis, to exchange scientific information on generic and applied areas of the conference, and to discuss recent advances in theoretical and applicational aspects of such topics.

* Call for Papers

The five-day technical program will consist of invited lectures and contributed papers. Papers related to the following topics are appropriate for submission to the conference.

* Nonlinear Functional Analysis, * Fixed Point Theory and its Applications, * Geometry of Banach Spaces, * Convex Analysis, * Set-Valued Analysis, * Game Theory, * Optimization, * Multicriteria Problems,

* Partial Differential Equations and their Applications to Economics, * Mathematics of Finance and Engineering, * Data Mining and Neural Network

* Scientific Committee

T. Ando (Hokkaido Univ., Japan), F. E. Browder (Rutger Univ., USA), K. Fan (Univ. Cal. Santa Barbara, USA), A. Ioffe (Technion - Israel Inst. Tech., Israel), H. -C. Lai (Chung Yuan Christian Univ., Taiwan), L. A. Petrosjan (St. Petersburg State Univ., Russia), R. T. Rockafellar (Univ. Washington, USA), P. L. Yu (Univ. Kansas, USA)

* International Program Committee

W. Takahashi (co-chair, Tokyo Tech., Japan), T. Tanaka (co-chair, Niigata Univ., Japan), H. Aikawa (Shimane Univ., Japan), S. Akashi (Tokyo Univ. of Science, Japan), J. Borwein (Simon Fraser Univ., Canada), R. Bruck (Univ. Southern California, USA), C. Castaing (Univ. Montpellier II, France), K. Goebel (Maria Curie-Sklodowska Univ., Poland), M. Fukushima (Kyoto Univ., Japan), N. Hirano (Yokohama National Univ., Japan), H. Kawasaki (Kyushu Univ., Japan), W. A. Kirk (Univ. Iowa, USA), M. Kojima (Tokyo Tech., Japan), H. Komiya (Keio Univ., Japan), A. T. Lau (Univ. Alberta, Canada), D. T. Luc (Hanoi Inst. Math., Vietnam), K. Naito (Kumamoto Univ., Japan), T. Nishishiraho (Univ. the Ryukyus, Japan), K. Nishizawa (Josai Univ., Japan), S. Park (Seoul National Univ., Korea), J. -P. Penot (Univ. de Pau, France), L. Qi (Hong Kong Polytechnic Univ., China), S. Reich (Technion - Israel Inst. Tech., Israel), B. Ricceri (Univ. Catania, Italy), S. Schaible (Univ. California Riverside, USA), M. -H. Shih (National Taiwan Normal Univ., Taiwan), B. Sims (Univ. Newcastle, Australia), T. Tanino (Osaka Univ., Japan), M. A. Thera (Univ. Limoges, France), J. R. L. Webb (Univ. Glasgow, UK), V. I. Zhukovskiy (Russian Cor. Inst. TLI, Russia),

* Dates to Remember

March 31, 2005 : Pre-registration and deadline for submission of abstracts.

April 30, 2005 : Acceptance notification and distribution of registration accommodation forms.

May 31, 2005 : Deadline for early registration.

June 30, 2005 : Welcome reception party.

September 30, 2005 : Deadline for full papers.

* Correspondence

Dr. Yasunori Kimura, The Secretariat of NACA2005, Dept. of Mathematical and Computing Sciences, Tokyo Institute of Technology, O-okayama, Meguro, Tokyo 152-8552, JAPAN, FAX: +81 3 5734 3208

* Further Information: Email: naca2005@mathweb.sc.niigata-u.ac.jp <http://www.sc.niigata-u.ac.jp/naca2005/>

V JAMS から 事務局

V - (1) 小松勇作先生御逝去 井関清志

小松勇作先生が 2004 年 7 月 30 日に逝去された。先生は 1914 年 1 月 2 日にお生まれになり、東京帝国大学の理学部の数学科を卒業され、同大学の講師をされ、その後、東京工業大学の教授となり、その生涯を教育と研究に捧げられた。

MJ の発刊時代に論文を書かれた。その後 MJ の editor や International Advisory Board のメンバーとして、MJ の発展に大変なご尽力された。論文の referee をされたときには、全部の計算を自らされ、すべての誤りを細かく指摘されていたことには、非常に深い感銘を受けた。

先生には、日本語による著作も多くある。先生の学生時代は今日では、想像もできない時代であった。園正造、小倉金之助、三上義夫、黒須庚之介などの先生は和服姿で教壇にたち、必要な書類は風呂敷に包んでの入室されることもしばしばであった。こういった時代のなかで、1910 年代には、19 世紀生まれの藤原松三郎、窪田忠彦、小島鐵蔵、掛谷宗一、園正造、高木貞次、清水辰次郎などの諸先生たちは多くの弟子を養成しながら、自らも国際的な貢献をされ、日本の数学がヨーロッパ数学の仲間に入っていった。つぎに 1900 年から 20 年代までに生まれた人たちの国際的な多くのすばらしい貢献によって、日本の数学は世界の数学のなかにその足場を確立した。小松先生はこの時代の数学者であった。

戦前、数学は漢字 + カタカナの時代で、当時、阪大の数学教室から出ていた全国誌上数学談話会のガリ版時代のものから参考に当時の文章の書き方をしのみよう、ガリ版時代は送ってこられた原稿を謄写版に書くのは、吉田、角谷先生が主であった。福原先生はローマ字で日本文を書かれた。卵形面の擬似法線に関する窪田先生の一文(昭和 9 年)「高須君ガ余ニ擬似法線ガ法線ト合スル如キ点ガ幾ツアルデアロウカ... 此問題ハ非常ニ六ヶ敷イノデ全然未解決デアアルガ、少ナクトモニツアルト言ウコト又ハ次ノ様ニ簡単ニ証明サレ此考ヘガ或ハ問題解決ノ助ケニナルカモ知ナイカラ茲ニコレヲ述ベヨウ」というような書き方である。

当時、人気のない分野は、集合論、実変数関数論、(和田の湖というすばらしい発見がありながら、いま殆んど利用しない名前の) 解析的位相幾何学、(Hjelmslev の平面は知られていたが) 幾何学の基礎、(Gödel の不完全性定理はすでに、岩波講座のなかで、くわしく紹介されていたが) 数理論理学、組合わせ論、(記述統計学から推測統計学に移行しつつあったが) 統計学を含めて、応用数学などであり、行列、線形代数という言葉はまだ公認されていなかった。逆にみながりたがっていた分野は代数的位相幾何学であった。なかでも、Alexandroff-Hopf の Topologie(ドイツ語) は人気があった。いまのコンパクトは当時ビコンパクトといっていた。そこでは、Montel の正規族がよく話題になっていた。一方、Lefschetz の Topology(英語) は悪名高かった。Weyl の「Riemann 面」はまだ familiar でなかった。

こういったなかで、戦前の数学では、複素変数関数論は数学の花形の一つであった。当時の話題は単葉関数での Bieberbach の係数問題を解くことであった(Littlewood の結果をもっとよくすること)。もう一つの関心は複素関数の正則性の問題で、D.Menchoff のフランス語の小冊子が重要な役割をしていた。また複素数ではない、2 元数上の解析学を高須鶴三郎先生が構成し、大きな原稿を作られた(これは $a + bi$ において、 $i^2 = 0$, 或いは 1 になる)。当時の日本の代数学者も、解析学者も関心を示さず。むしろこの仕事を軽蔑し、完全に無視した。これらの数は 2 次の行列で表現され、立派な貢献であったが、誰もそれをいわなかった。最近になって、学士院記事の短い概説が海外で注目されるようになり、G.Price の本で紹介されている。

内容的に高度な関数論の参考書は辻正次「複素関数論」(共立)¹⁾、「多複素変数関数論」、「調和関数論」(岩波)¹⁾、清水辰次郎の「ばん近関数論」(岩波)¹⁾ が出版されていた。こうした雰囲気の中で、小松先生はこの関数論の研究に向かわれた。ここでは、その研究内容には触れないが、きわめて重要な著作があるので、それに触れておこう。なかでも、東海数学双書に書かれた変分学(昭和 22 年発行)は日本でまだこの方面のくわしい参考書がない時代に(Morse の理論はすでに知られていたが) 古典変分学をまとめて解説された(いまでも) 唯一の良書である(黒須庚之介先生の変分学はついに未刊のままになった)。

また 1944-49 年に共立出版から出た「等角写像論(上, 下)」は当時、これだけまとまったこの方面の著作はなく、これは非常に貴重な文献であった。日本では、吉田洋一の「等角写像論」(岩波)、また辻正次の「複素変数関数論」(共立)の後半、海外では、C.Caratheodory, Conformal Mappings, (Cambridge Tracts) と L.Bieberbach, Einführung die konforme Abbildung, (Sammlung Göschen), 1927 があっただけである。しかし両方とも、薄い本であった。いまでは、多くの日本語の数学書が英訳され出版されているが、当時このような習慣はなく、日本人のなかでだけ読まれていた。今日にいたるまで、世界にはこのような著作はなく、これはいまでも、世界的な名著になかに数えられる。補足して、英訳できないものか。なお、近い将来、小松先生についての MJ 誌に予定されている Obituary で、先生の御功績については、もっと詳しく解説されるだろうから、それをみて頂きたい。医上の業績は、私の無知で紹介できない。最後に先生のご冥福を心からお祈りします。

¹⁾ ここで「岩波」というのは、昭和 7 年から 10 年までに出版された岩波講座「数学」の意味である。また「共立」は、ばん近高等数学講座である。これらの講座には、いまでも読めば有益な多数著作がある。ちなみに、「岩波」の功刀金二郎「抽象空間論」は学士院恩賜賞

の対象作品であった。清水辰次郎「ばん近関数論」の第一分冊の Nevanlinna の第一，二基本定理は清水，吉田耕作両先生が書かれ，第二分冊は角谷静夫先生が一人で書かれたが、文体統一で非常に苦勞しておられた。

V - (2) Life member について 事務局

2005 年から会員の Life member 制を新設します。

(1) Life member は、過去 10 年以上正会員であった方が Life member duty を払込めば、その後は会費の払込が不要のまま、会員の資格を生涯継続する制度です。

(2) Life member duty は、国内会員は 7 万円、海外会員は US\$600、途上国会員は US\$500 とします。

(3) この制度は 2005 年から開始し、2005 年 1 月 1 日より随時申し込みの受付を致します。

V - (3) 2005 年会費納入の御願い

JAMS の諸活動を維持していく為の年会費を納めて頂く時期となりました。

2005 年からは、単年度の会員の外に 3 年会員、生涯会員 (上掲) の制度を始めました。又従来の 4 年会員制度は、4 年期間の継続期間終で打ち切らせて頂き、新たな申し込みは御受け出来ませんので、代わりに 3 年又は生涯会員を御選択下さい。なお、生涯会員は随時お申込を頂きますが、大変恐縮ですが、3 年会員は 2005 年、2008 年... と、2005 + 3n 年にのみお申込を受けさせて頂きます。

それぞれの会員の会費及び SCMJ(print 版) の購読費は以下の表のようになっておりますので、よろしく御願い致します。いずれの会費、購読費も、同封の振替用紙にてお支払い頂きますよう御願い致します。なお、今年度会費御支払いの不要の方は、振替用紙を同封しておりませんが、4 年会員の方で、購読費を年払いして頂いている先生については、振込用紙を同封させて頂いておりますので、本代のみ御支払い願います。

以上、よろしく御願い致します。

Membership duty

Membership	JAPAN	S-JAPAN	Foreign	S-Foreign	Developing
1-year	A1 : ¥7,000	S-A1 : ¥3,500	F1 : US\$50	S-F1 : US\$30	D1 : US\$30
3-year	A3 : ¥18,000	S-A3 : ¥9,000	F3 : US\$120	S-F3 : US\$60	D3 : US\$70
Life Member	Life : ¥70,000		FL : US\$600		DL : US\$500

Subscription Information for JAMS members

	¥	\$
Annual Subscription rate	¥6,000	\$60
Three years prepaid subscription rate	¥15,000	\$150

JAMS 会員募集

1. JAMS の出版物 : JAMS は、創刊より半世紀、国際的に高い評価を得ている *Mathematica Japonica* (M.J.) と、その姉妹誌で電子 *Journal* と *Paper* 誌とを持つ *Scientiae Mathematicae* (SCM) とを発行してきました。両誌は、合併して”21 世紀 MJ/SCM New Series ”*Scientiae Mathematicae Japonicae*(SCMJ) として、電子版は 2000 年 9 月より、印刷版は 2001 年 1 月より、年間 6 冊、1200 頁の出版をしています。

1) Editorial Board には国内だけでなく、海外の著名な研究者 45 名が参加している。

2) 世界の有名な数理科学者の original paper や、極めて興味ある expository paper を International Plaza 欄に掲載されています。

3) SCMJ に掲載された全論文が、*Math.Review* 及び *Zentral blatt* に Review され、世界の research group に紹介されます。また雑誌は世界各国の図書館へ広く配布されています。

4) Editor を窓口として直接論文を投稿できて、迅速な referee、accept 後 (又は組版後)www 上に待時間 0 で発行されています。

2. JAMS の研究集会: 研究仲間が、ゆっくり時間をかけて、発表、討論をする特色ある研究集会が毎年行われ非会員も含む多数の参加者の、活発な研究交流の場となっている。又、JAMS 学術賞、清水賞の受賞講演等、最近の研究 frontier の presentation が行われている。

3. 2004 年から Videoconference による国際研究集会を始めており、会員はこの研究集会の企画 (Organize)、又は参加 (Participation) をする事が出来ます。

JAMS の会員の特典

4. SCMJ 電子版の購読 (print out も含む) 無料, 2. SCMJ print 版の少額での (下表 1) 購読, 3.page charge の discount (下表 2)

表 1

	単年度会員	3 年会員	著者会員	機関購読会員	定価
Paper	¥6,000 US\$60	¥15,000 US\$150	¥6,000 US\$60	¥33,000 US\$300	¥45,000 US\$400
Online	Free	Free	*¥6,000 *US\$60	/	/
Online +Paper	¥6,000 US\$60	¥15,000 US\$150	¥9,000 US\$90	¥45,000 US\$420	¥57,000 US\$520

表 2

	Member	Non Member
Paper : P	¥3800 (US\$35)	¥4500 (US\$43)
T _E X : T	¥2200 (US\$20)	¥2800 (US\$26)
Js : Js	¥1100 (US\$10)	¥1650 (US\$15)

2005 年の会費は次のようになります。

表 3

Categories	国内会員	海外会員 \$建て	途上国会員 \$建て
単年度 A 会員	¥7,000	US\$50	US\$30
3 年 A 会員	¥18,000	US\$120	US\$70
単年度 S 会員	¥3,500	US\$30	US\$20
3 年 S 会員	¥9,000	US\$70	US\$50
生涯会員	¥70,000	US\$600	US\$500

但し A 会員は正会員をさし、S 会員は学生会員と高齢会員 (70 才以上) をさします。

日本数理学協会

Japanese Associations of Mathematical Science

〒 590-0075 堺市南花田口町 2-1-18 新堺東ビル内

Tel(072)222-1850 / Fax(072)222-7987

URL <http://www.jams.or.jp>